

2019年度しあわせ研究  
しあわせを実現する  
「対話力」の育成に向けて

研究員 藤浦五月  
宇野聖子、桑野幸子



アクティブ・ラーニング型授業、プロジェクト型授業が注目されるなか大学においても他者と話し合いながら活動を行う機会は増えています。異なる意見を交換することはときに対立・衝突を生みますが、異なる意見からこそ新たな発見や内省は生まれます。違いを楽しみ、主体的に話し合う姿勢・スキルを手に入れることは豊かな学びを生むことでもあると考えられます。しかしながら、「話し合うこと」は容易なことではありません。違う意見を言いたいけれど空気が悪くなりそうと言えない、自分の意見が無視されたように感じる…など、話し合い活動やグループ活動に悩みを抱える学生も多くいます。本取り組みは、「価値観・考え方の違いを乗り越え、コミュニティ(グループ)の力に繋がる話し合いを行えるようになること」を学生だけでなく社会に暮らす人々全員のしあわせと捉え、達成すべきミッションとしています。本ミッションを達成すべく、本研究では、授業内で行われる話し合いで躓くポイントを実際のデータから分析し、意見の違いを乗り越えながら主体的に話し合いに参加するための教材

開発・改善を行いました。ディスカッショントレーニングの難しさは、メンバーやトピックによって議論の流れが読めないこと、意見を言う・質問をするなどの単体練習やディスカッションの中での役割についてのメタ的な知識のみでは議論全体への対応力がつかないことが挙げられます。本実践は、そうした困難への挑戦でもあります。

データ分析の結果、ディスカッション全体の構造においても質の高い話し合いを行うには「良い質問をすること」がカギになるということがわかりました。また、それらの良い質問を議論の前半で行えたグループがアイデアを積み上げることに成功していることも伺えました。本開発教材では、単に「意見を述べる」「反論する」「相手の発話を促す」といった部分的なやりとりではなく、全体を意識しそれまで出たアイデアを整理・質問しながら積み上げる練習を取り入れました。今後も教材・実践の改善を続け、多様なバックグラウンドを持つ学生たちがディスカッションスキルを身につけ共に学び、世界に羽ばたきしあわせを形にしてくれることを願っています。

本取り組みは、第53回JLEM(日本語教育方法研究会)にて「アイデアを積み上げる」というディスカッション分析視点の独自性と、実践・改善の積み重ねが評価され、学会奨励賞に選ばれました。